

西田哲学と「東洋的世界観の論理」

西田哲学会 2021年7月24日

西平 直 (京都大学)

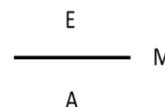
1. 東洋と西洋の接合点としての日本文化

- 1, 「東洋的世界観の論理」(「論理と数理」10 - 69)
- 2, 井筒俊彦「東洋哲学」を介して西田哲学を読む
- 3, 『日本文化の問題』(テキスト二種、「学問的方法」、「東西古代の文化形態」、皇室、社会的影響)
- 4, 東洋と西洋の接合点としての日本文化

2. 西洋文化・東洋文化、そして、日本文化 — 「客観的世界」

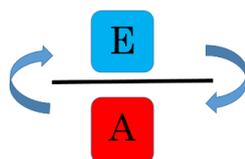
- 1, 「東洋文化の底には、論理と云ふものがないであろうか」。(9 - 10)
- 2, 西洋論理では足りない(「自己を含めた世界」を考察することができない)。
- 3, 仏教論理は、主体の底に、客観的世界を見出した。
- 4, 西洋は「主体から環境へ」、東洋は「環境から主体へ」

(補) 「M・A・E」の構図。 EとAが、Mを介して、結合する。

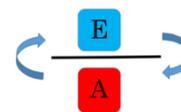


「Mは個物と個物との媒介者、eは個物、Aは一般である」(『哲学の根本問題続編』「序」6巻、167頁)。(参考：末木剛博『西田幾多郎(全四巻)』、春秋社)

自己矛盾的に、
Aが自己自身を
否定して、Eとなる



自己矛盾的に、
Eが自己自身を
否定して、Aとなる



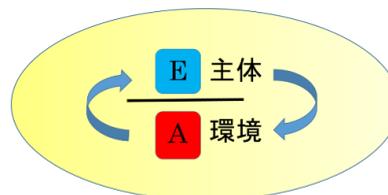
- 5, 日本文化の可能性。インド文化、ヨーロッパ文化に対して「我国文化」

6, 客観的世界

「真に客観的なる世界は、何処までも我々の自己を否定すると共に、我々の自己を成立たしめる世界、即ち我々の自己を包む世界でなければならない」。(9 - 72)

我々自身を含んだ世界(「客観的実在性」)。「真に具体的な歴史的実在の世界は、我々の自己がそれに於てある世界でなければならない」。(9 - 55)

見ると作る一物となって見、物となつて行ふ



3. 物来って我を照らす —物の真実に行く

1, 『日本文化の問題』は宣長「直毘霊」から始まる。

*宣長の「物の真実に行く」は、科学的精神と重なるか。

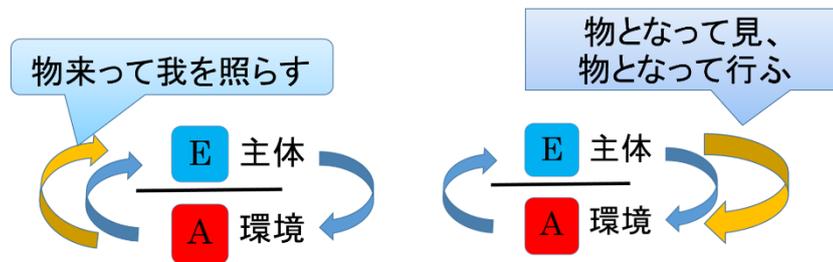
2, 「物の真実に行く」の系譜と「物となって考へ、物となって働く」の系譜は異なる。

3, 「物に行く」を二段階に分けてみる。源了圓による指摘。徂徠への着目。

4, 「物来って我を照らす」 「(略) 我々の自己は物となって見、物となって働くと云ふ、物来って我を照らすと云ふ。此处では、我々は物を自己から離して、対象的に見て居るのではない、心身一如的である。」「知識の客観性について」(9-426)

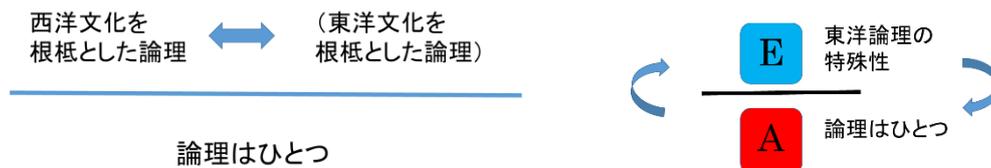
「自己が客観に照らされる」。(9 - 82)

「世界がそれ自身に十全なる表現を有つ所に、我々の真の自己がある」。(9 - 8)



4. 具体的論理と「事事無礙」の「事」 —「具体的一般」

1, 「論理に二種あると云ふのではない。論理は一でなければならない」。(9 - 12)



2, その関係。「我々は先づ西洋論理を論理として之によって論理的思惟を形成せなければならぬ。併しそれとともに、私はそれが単に論理そのものと云ふのではなく、西洋文化の精神を根柢としたものたることを思はざるを得ない。単に西洋論理的思惟によって東洋文化を考へようとする時、歪めないでは考へられないと思ふのである」。(9 - 69)

3, 「我々は深く西洋文化の根柢に入り十分に之を把握すると共に、更に深く東洋文化の根柢に入り、その奥底に西洋文化と異なった方向を把握することによって、人類文化そのものの広く深い本質を明らかにすることができるのではないか」。(「学問的方法」9 - 91)

4, 世界文化に貢献する。

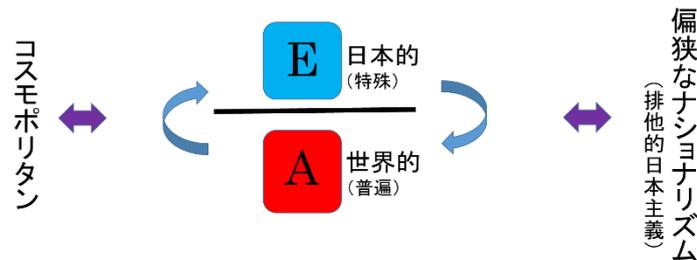
「一層深い大きな根柢を見出すことによって、両者共に新しい光に照らされる」。(9 - 91)

5, 『日本文化の問題』は、東洋の論理を「普遍」と論じる（特殊性の側面が弱い）。

* 東洋論理も、普遍であると同時に特殊ではないか。

6, 「コスモポリタンになると云ふことではない」（「学問的方法」9 - 88）

* 西田は「日本的学問」を願ったのか



7, 具体的論理 「具体的論理は、歴史的生命的特殊相と離れることはできない」(9-11)

日本精神は「事」を重視した。「事」（事事無礙の「事」）

= 「物」（「物となって見、物となって働くと云ふ、物来って我を照らすと云ふ」）

= 「具体的一般」

結び

東洋文化から出て来る「新しい論理」をそのまま「事物の論理」と語る。

排他的日本主義に対して、普遍性を強調する必要。

しかしコスモポリタンではない。特殊性を失ってはならない。

- ・ 普遍的な使命を担う日本（特権化につながる危険に対して）
- ・ 普遍主義の問題、遅れて近代を開始した地域（the west vs. the rest）

「東洋思想と云ふやうなものは、つまり我々が其の中に育ってきた思想、例えば仏教のやうなものは …」（「歴史的体身」12巻、343頁）。

この「我々が其の中に育ってきた思想」を、西洋の論理で解き明かすだけでは足りない。

それを論理化するために適切な「新しい論理」。

* 西田は「東洋思想」を課題として示した。井筒の「東洋哲学」をその課題と重ねて読む。

井筒の「東洋哲学」理解を手掛かりとして、西田哲学を読み直す視点。

参考：西平 直『井筒俊彦と二重の見』（おねうま舎、2021年2月）

同 『西田幾多郎と双面性』（おねうま舎、2021年8月予定）